

・優秀賞

守りたいもの

道仏中学校（階上町）

三年 上野太樹

僕の家は稲作農家です。現在は米作りをしている父は、昔大工をやっていたそうです。僕は父に、なぜ大工をやめて米作りを始めたのか聞いてみました。すると父は、「米作りをやる人がなくなったからだ」と答えました。

大工も米農家も同じ仕事ですが、米農家の労働力はお金になっていないと正直僕は思います。自然が相手の農業は大変な仕事です。お米の価格が高いという人がいますが、僕から言わせたらまだまだです。種苗、肥料や農薬など、お米を育てるのにかかった経費を差し引くともうけはほとんどありません。「農家の時給は10円」と言われていますが、それは大げさなことではなくて現実です。大変な米作りは、農業従事者のただに等しい労働力に支えられて成り立っているのです。

今年の米の価格高騰は、「令和の米騒動」と言われるほどの事態になりました。安いうちは何も関心をもたれなかった米の価格は、毎日ニュースとして取り上げられていました。猛暑の影響による米不足。需給バランスの崩れ。凶果、極端な品薄となり、備蓄米が放出されました。全国各地の米農家は、一連の報道をどんな気持ちで眺めたことでしょうか。父は、テレビに時々目をやる僕に、とつとつと語り続けます。

米騒動のもと、日本の米作りの課題について、報道は過熱しました。農業従事者の高齢化。地球温暖化による異常気象。猛暑は高温障害を引き起こし、稲がまともに育たないという被害につな

がりました。減反政策の影響やインバウンド需要の増加。インフレによるコストの増大。確かにこれらの問題は、日本の稲作農家全体の問題ですが、青森県の問題でもあり、個々の生産家族の問題でもあるのです。ひと度どこかが大きく崩れると、取り返しのつかないことになりかねません。

父は繰り返し言いました。「米の流通がよくなれば……。」と。血のにじむような努力をして生産されたお米です。そのおいしいお米を待つ消費者のもとに、できるだけ無駄のないルートで届いてほしい。声を上げられずにいる多くの生産者の、もどかしい思いがその言葉にまつまっている気がしました。

「今は暑すぎるけど、三十年ぐらい前には、冷害があつて、米が全滅したことがあつたんだ。あの時の悔しい気持ちは忘れられない……。」

今日本の米作りを担っているのは、多くが高齢の方たちです。言い尽くせないほどの困難との対峙。かつては、東北特有のやませ。そして今は猛暑。暑さに強い品種（あきたこまちやはれわたりなど）を植えたり、水はりなどの対策。自然災害がどれだけ厳しいものなのか。努力が一瞬のうちに消えることの怖さが父の話から伝わってきました。

僕は物心ついた時から、時々家の手伝いをしてきました。ビニールハウスでの作業。田植えや稲刈りの手伝い。昔は何人かの手伝いにきていましたが、今は誰も来ていません。悲しくなるほどの人手不足。つらい環境の中でも、米作りの営みは続きます。わが家の田んぼは山の方にあり、米にとっていい環境です。川から水を引き、父母が米作りに精を出しています。おそらく収穫が早いでしょう。災害にあわず、期待通りの収穫になりますように。父の背中につぶやきました。

僕の願いは、日本のおいしいお米や生産者が守られることです。そのためには、みんなで知恵を出し合うことが必要です。今の時代に合った、若者が従事したくなるような魅力的な米作りの体制の構築を。米農家だけが苦勞を背負わされることのない、「米作りのミライの形」を。その大切なものを守るために、僕はまず、自分の意見をもつことから始めていきたいです。

・優秀賞

変わるもの、変わらないもの

新城中学校（青森市）

三年 三浦茜音

私はまだ四歳のとき、上着を着て外に出ないといけないくらい、五月は肌寒かった。そんな中、半袖をさらにまくって、額にタオルを巻いて汗だくになりながら田植えをする近所のおじさんや、お父さん、じっちゃん（祖父）、じじ（曾祖父）たちがいた。その中でじじは大きな機械に乗ってお米の苗を植えていて、私と兄が手を振っているのに気が付くと遠くからでも白い歯が見えるくらいに笑って手を振り返してくれた。私と兄が小さく分けられた苗を一生懸命運べば、くしゃくしゃと頭をなでてくれた。お昼になると、お母さんやばっちゃん（祖母）が、塩おにぎりや缶ジュースをもって田んぼに来る。私と兄は、「早く、早く！」とじじの両手を引っぱりながら早歩きでお母さんたちの元へ向かう。少し冷めた赤飯とおにぎり、菓子パン。私は小豆が苦手ですが、菓子パンかおにぎりを選ぶ。おにぎりは冷めてもやわらかくてお米と塩だけなのに何個でも食べることができた。じじは私と兄に言った。

「今植えた苗っこも秋さなればめえ米さなるはんで。でも手揚げばそれなりの味にしかならね。だからおめんどが丁寧に運んだらんで今年の米だばたげめえびよん。」

当時は何を言っているのか分からなかったけれど今考えるとじじがどれだけお米に誇りをもっていたのかがよくわかる。

じじは五年ほど前から機械に乗れなくなった。八十をこえてから物忘れをよくするようになってしまった。それからはじっちゃんが

機械を運転して、身体が成長した私と兄ももうお手伝いじゃなく、大人と同じように大きな苗を運んだり、苗を抜いたトレーを洗ったり、仕事の量も増えた。それでも苦痛にはならなかった。今はもう小豆も食べられるようにはなった。まだ好きとは言えないけれど、認知症が進んだじじは、私のことを忘れてしまった。それでも、しばらく一緒に過ごすと思いついてくれたのか、私の名前を呼んでふっと笑いかけてくれる。それが嬉しくてたまらなかった。今年の田植えは兄の高校の行事と被ってしまった一人でやることになった。さすがに二人分の仕事はきつくて、田植えで久しぶりに疲れを感じた。今年も、じじは田んぼに来なかった。来られなかった。私の中では永遠に田んぼにいるイメージだからまだ慣れない。お昼に菓子パンを食べて、午後も田植えをがんばった。午後になれば作業にも慣れて、作業速度が一気に上がった。午後四時には家に帰ることができた。

じじの家のご飯の時間は、私の家よりも早い。まちわびた今日のごはんはカレーライスだった。お米をお皿の半分盛りに盛り、お肉を少し多くすくったカレーをもう半分盛る。美味しそう匂い一口、いつもより多く口の中に入れる。美味しい。すごく美味しい。去年の私たちががんばってつくったお米。新米にも負けないほど美味しかった。

「明日もがんばれよ。」

お米の一粒一粒に、そう言われたような感じがした。二回おかわりした。

じっちゃん達は、もう少ししたら米農家をやめるつもりらしい。私はちよっぴり寂しくて、ちよっと落ちこんだ。あと何回もできない農作業の一回一回を丁寧に、大切にしようと思った。手を抜いたらそれなりの、丁寧に心をこめたら最高のお米になるから。

私たちが成長する中で変わってしまうものはたくさんある。でも、毎日の食卓にお米が並ぶことは、きっとこれからも変わらないだろう。だからこそ、忘れないでほしい。お米一粒一粒に込められた思いを。お米づくりに関わった人間として、私はこれからもお米を大切にしたい。そして、あなたにも、その気持ちを持っていてほしい。秋の稲穂のようにあたたかな思いが未来に実りますように。

・優秀賞

備蓄米が我が家に

浪打中学校（青森市）

一年 野宮大和

二〇二五年、六月。いつも通り、母が作ってくれた朝ご飯が、食卓の上に並んでいる。

「今日から備蓄米だよ。」

と、母がお弁当を作りながら言った。

我が家は五大家族で、毎日一升ほどのご飯を炊いて食べている。家族全員、お米が大好きで、特に父は朝昼晩三食、お米でなければいけないくらい好きだ。

最近、お米の値段が高くなり、母が困っていたところ、お米不足と価格高騰解消のため、政府が蓄えているお米を放出するということをニュースで知った。政府備蓄米というものがあるということも、その時初めて知った。

備蓄米がお店で売られるようになってからも、お米売り場で目にするものもなく、我が家ではなかなか買うことができなかった。どこに売っているのかわからないので、祖母や叔母、母の職場の方にまで、売っていたら教えてほしいと、情報を求めていた。

そんなある日の夕方、母が

「今ここで備蓄米を売っているみたい！」

と言って、母の職場の方から送られてきた写真付きのメールを見せてくれた。袋に備蓄米と書かれ、スーパーのカートに積まれているお米の写真だった。ご飯がないと困るので、

「買いに行った方がいいんじゃない？」

と母に言ったら、

「よし！今すぐ買いに行ってくる！」

と、母はすぐに車で買いに出た。僕は学校の宿題があったので、母が備蓄米を買ってくるのを願って留守番をして待っていた。

「ただいま……」

なんだか元気がない母が、スーパーから帰ってきた。

「お米買えた？」

と聞きながら、買い物をしてきた母に視線を向けた。しかし、そこにお米はなかった。僕まで残念な気持ちになった。母は、スーパーの中のお米売り場まで走って行ったけれども、備蓄米の積まれているカートが、スーパーのバックヤードに片付けられていくのを見た。と悔しそうに教えてくれた。この日、備蓄米は買えなかったのだ。

それから数日後、僕が学校から帰宅すると、リビングのテーブルに、見せつけるように備蓄米と書かれたお米が置かれていた。

このお米はどうしたのかと母に聞いたら、母の職場の方が、お米をたくさん食べる僕の家族のために買ってきてくれたのだそう。袋を優しく持ち上げて喜びながら備蓄米をかかえている母を見て、僕もうれしくなった。そして、無事にお米が入ったことで僕は安心した。

やっとの思いで我が家にやってきた備蓄米を、ようやくこの日の朝に食べられることになったのだ。

茶わんに盛られているホカホカご飯を見て、どんな味がするんだろうと少し楽しみだった。

「いただきます。」

初めての備蓄米を一口食べてみた。少し硬めで、お米の風味が強く感じられた。いつもと変わらずおいしかったご飯に、僕はほっとした。

毎日白いご飯が食べられることは、当たり前のことだと思っていた。しかし、お米が売られていないとか、売られていても高すぎるとか言われているのを聞いて、僕は初めて、お米が食べられなくなるのではないかという不安を感じた。お米が買えなくなる、こんなにもたいへんな思いをすることになる僕たちが、これからおいしいご飯が食べられるように願ひ、感謝してお米をいただくように心で誓った。

・優秀賞

私を変えた一杯のごはん

三本木中学校（十和田市）

三年 対馬桂音

「今日のごはん、ちょっと固いかも」

ある日、食卓でお母さんがつぶやいた。いつもより白くない、少し茶色がかったお米を見て、私が思わず、

「なにこれ？」と聞くと、

「古米。去年のお米。最近高いからね、新米じゃなくてもいいかなって……」

そう言って笑ったお母さんの顔を見ると、私はなぜだか返事ができなかった。

炊きたてのごはんを一口食べてみた。確かに少し固めだったけれど、おいしかった。おいしかったからこそ胸が詰まった。私はずっと「いつものごはん」が続いていくと思いきや、あれほど、それはもう変わり始めていた。「物価が上がっている。」テレビやニュースで聞くこの言葉がようやく自分の生活に入りこんできた気がした。

お米の値段が高くなっている原因は、異常気象や燃料費の高騰、生産者の高齢化など、いくつもあることを知った。だけど、そんな中で一番心に残ったのは、「それでも食卓に出してくれる人がいる」ということだった。お母さんは、家計と向き合いながら、

なるべくおいしいごはんを私に食べさせようとしてくれていた。それに、農家の人たちだって厳しい状況の中で一生懸命にお米を育ててくれている。ごはん一杯の裏に、こんなに多くの人の思いや努力があるなんて知らなかった。

学校の給食で白ごはんが出ると、「パンがよかった」と言う声が聞こえる時がある。最近、その言葉を聞くとモヤッとする。

「じゃあ今食べてるそのごはんはいらなの？」と質問したくなる。私も前は文句を言っていたが、もう言わない。どんなお米でも、どんなふう炊かれていても、それが目の前にあること自体が当たり前ではないと分かったから。

私はここ二、三年で「フードロス」という言葉を見ることが増えた。大量に作られた食べ物、食べられないまま捨てられてしまっている。世界には、食べるものが足りない国もあるのに。その一方、日本ではまだ食べられるごはんが毎日のように残されている。これは、誰かの努力や命を無駄にしている気がする。

これから先、お米はもっと高くなるかもしれない。「たっぷりよそってあげるね」という一言が特別なものになってしまう日が来るかもしれない。だからこそ私は、目の前にお米にしっかりと向き合っていきたい。作る人、運ぶ人、炊く人、そして一緒に食べる人。その全てに「ありがとう」の気持ちをこめて、「いただきます」と「ごちそうさま」を言いたい。

「いつものごはん」が変わりはじめた。でも、変わってしまうからこそ大事にしたい。大人になって、自分が誰かのごはんを作るようになったとき、あの日感じたこの気持ちを忘れたくない。今、目の前にある一杯のごはんは心に「ありがとう」と言える人でありたい。

・優秀賞

初めて作ったご飯

第一中学校（弘前市）

一年 須藤小夏

私が四才の時、母が体調不良で寝込み、家事ができなくなった。いつも当たり前のように作ってくれるご飯もその時は兄が買ってきてくれたスーパ―のお弁当だった。父は仕事で家に居ず、大人には頼れなかった。

母の様子が気になり部屋をのぞくと、近くに行かなくても辛いのが伝わってきた。ご飯も食べていないようで私はとても心配になった。自分に何かできることがないかと考えたとき、母がおにぎりの作り方を教えてくれたことを思い出した。温かいおにぎりを食べれば元気になるかと思ったから、私はすぐにすい飯器を確認しに行った。ご飯が少し残っていたからおにぎりを作ろうと思った。一人で作るのが初めてだから上手においしく作れるか不安だった。でも、母が元気になってほしいからがんばろうと思った。最初に皿を準備して、ご飯がこぼれないようにゆっくりと入れた。そして味をつけようと、混ぜ込みご飯のもとを入れてかき混ぜた。そして、おわんを準備して、ラップをしき混ぜ込みご飯を入れた。次に、おにぎりを丸めようと思いやってみただけ思ったように丸められなくて困ってしまった。その時、母が教えてくれたコツを思い出した。おにぎりは強くにぎらず優しくつつみ込

むようにするとおいしく作れるということだ。私はそれを意識して、優しくおにぎりをにぎった。おいしくなると、母が元気になるようにと心を込めてにぎった。そして、十分ほどでやっとおにぎりが完成した。私は、達成感にあふれていた。一人でおにぎりを作れたことがうれしくて、そのおにぎりを母に食べてもらえると考えるとよりうれしい気持ちになった。私は、母を起すにはいけないと思ってゆっくり忍び歩きで部屋に入って、まくらもとにおにぎりを置いた。次の日、母が起きてきて

「おにぎりどうしたの？」

と聞いてきたので、私は自信満々に

「一人で作ったんだ！」

と言った。すると母は、

「作ってくれたの！ありがとう。とってもおいしかったよ。」

と言ってくれた。その時、私は自分が作ったものを食べて、おいしいって言うてくれるってこんなにうれしくて幸せなんだなと思った。それに、だれかのためにご飯を作るのってこんなに楽しいものなんだなと思った。

私は、このできごとをきっかけに料理を作って食べてもらうことが好きになった。ご飯は作る人も食べる人もどちらも幸せになれるとても素敵なものだと知った。だから、母が作ってくれたご飯を食べる時は、必ず感想を言うようにしている。そうすれば、母はうれしいと思うだろうし、ご飯を作るのが楽しくなると思う。ご飯は、健康な体で生活するために必要なものなことはもちろん、人の心まで健康にしてくれるものだと分かった。だから、これからもご飯を沢山食べて、作って自分や周りの人が健康でいられるようにしたい。